

第三次教育・文化ふくい創造会議（第3回会議） 議事録

- 日 時 平成21年3月16日（月） 13:30～16:00
□会 場 福井県庁7階 特別会議室
□出席者 赤土委員、伊藤委員、大廻委員、佐野委員、瀬尾委員、瀬川委員、祖田委員、
竹川委員、西委員、広部委員（10名、五十音順）
□事務局 伊藤教育庁企画幹、山内教育政策課長、持田文化課長、工藤文化課文化財保護室長、
竹内文化課参事

教育政策課長

それでは、定刻になりましたので、ただ今より第3回目の第三次教育・文化ふくい創造会議を開催させていただきたいと思えます。

開催に先立ちまして、まず広部教育長の方からごあいさつを申し上げます。

広部教育長

今日は知事が上京しておりますので、代わりましてごあいさつを申し上げたいと思えます。

今日は大変お忙しいところをおいでいただきまして、誠にありがとうございます。福井の桜ももうすぐ咲くんじゃないかと思っております。

皆様方には、ふくい文化の振興をテーマにしまして、これまで2回にわたって議論をしていただきました。その中で、皆様の意見の柱にありますのは、これからの文化政策は、芸術文化や文化財保護の分野だけじゃなくて、観光や産業政策、さらには都市計画やまちづくり等と結びついて、地域の元気や活性化につなげていくための主要政策の1つになるといった点でなかったかと思えます。

たまたま、先々週の3月5日の日本経済新聞の「経済教室」に、「閉塞打破、文化を起爆剤に」というタイトルで、青木文化庁長官の寄稿文が掲載されておりますのを、私も読ませていただきました。青木長官は、この中で「経済活動が社会的に停滞する中で、日本の文化活動は依然活発であって、その水準は世界から高く評価されている」「文化の持つ創造力・発信力の基盤を強化し、今の閉塞感を打破すべきだ」と、そしてそのためには、「芸術教育の強化や創造的な都市づくりとネットワーク化の推進、あるいはメディア芸術の振興等の対策が正念場にある」といった考え方を示しておられました。青木長官のこうしたご指摘は、皆様方からこれまでにいただきましたご意見、ご提案と共通する部分が多々見受けられるわけでございます。

福井県の例で申し上げますと、県立恐竜博物館はここ数年来、企業等とのコラボレーションや情報発信力を強めまして、入館者数も今年度は初めて40万人を突破するんじゃないかと思っております。また、今週は新たな恐竜も発表できるんじゃないかと思っております。こうしたよい流れを、その他の分野においてもぜひつくっていきたいと考えております。

この問題につきましては、来年度も引き続きご審議いただくこととしております。福井県の特徴や課題を十分引き出していただき、県民の暮らしの質が向上して、一人一人が夢や誇りを持って、豊かで潤いのある生活ができるようご提案をぜひともお願いしたいと思います。

本日も、それぞれの専門のお立場から、福井県の実情に即した具体的なご提案を数多く賜りますよう、よろしくお願いを申し上げます。

教育政策課長

本日でございますけれども、名城大学の丸山先生、それから埼玉大学の後藤先生、若狭ものづくり美学舎の長谷委員の3名については、都合により欠席となっておりますのでご報告申し上げます。

議事に入ります前に、お手元の資料だけ確認させていただきたいと思えます。

議事次第、それから委員の方の名簿と席次のほかに、本日の議論の資料ということで、資料1といたしまして、これまでのご意見等の取りまとめと今後深めていただきたい課題等をしたためました資料が第1でございます。それから、資料2といたしまして、前回も提出させていただい

ております県内の芸術・文化活動等の資料につきまして、少し宿題をいただいた点を追加させていただいた形で作成させていただいております。資料3は、今後の議題の参考になろうかと思ひまして、本県内のいろいろなイベントといいますか、伝統的なお祭りなどの祭事的なものをお付けしてございます。参考資料1は前回の議事録でございます。その他、今、教育長のあいさつにもありました日経新聞のコピーについては、そのままA3でお配りさせていただいております。

それから、前回、文化を引っ張る若者として、大学のサークル等の活動というような議論があって、今日は座長から資料を提出いただいております。また、西ゆうじ先生原作の「サンデー」に連載されていまして「日本一短い母への手紙」を今回本にされたものを大廻委員からお配りしていただいております。資料は以上でございます。

それでは、議事進行につきましては座長にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

祖田座長

本日は、大変お忙しい方ばかりでございますけれども、お集まりいただきましてありがとうございます。

先ほど、広部委員からもございましたけれども、文化庁長官の記事の中にもありましたけれども、日本の映画界その他の文化活動が国際的に注目を浴びていると。アニメ、漫画等も含めまして、新しいそういったものも含めて日本の文化活動が注目を浴びているというような紹介がございました。福井の小・中・高等学校の生徒の学力につきましては、皆さんご承知のように、全国でも一、二を争う学力を持っていると。特に、国語力が全国一であるということを知っております。国語力があるということは表現力があるということではないかと思ひますし、また文化・芸術というのはまさに内なるものの表現というふうに考えますと、いろいろな意味でこれからの福井県の将来の文化・芸術活動におきまして非常に希望があると、私はそういうふう感じておひまして、この議論も将来必ず生きてくるんじゃないかというふうにして、大変期待をしております。

大学のサークル活動の一覧を持ってまいりましたが、あまり参考になるようには思えませんが、福井大学のサークルの様子を、それから、福井県立大学のサークルの、名前だけでも、後で時間があれば私の方、学生の文化活動、スポーツ活動に対して若干まだあるかと思ひますので、見ていければと思ひます。

それでは、早速本日の議事に入りたいと思ひます。

第三次会議ですけれど、ふくい文化の振興ということをテーマに検討を進めております。これまで2回にわたりまして、事務局から提示いただきました論点を中心に幅広く意見を伺ってまいりました。私が受け取りました資料、改めて皆さんの意見の整理されたものを読ませていただきましたけれども、非常に幅広い、また、すばらしい意見を出していただいているように思ひます。

本日の資料につきましては、あらかじめ事務局から皆様のお手元に届くようにしてあると思ひますけれども、本日はこれまでの意見や提案を踏まえまして全体を再整理したものを資料1として準備してございます。こうして見ますと、比較的たくさんのご意見・提案をいただいた分野と、まだ十分意見をいただけていないというふうな分野もございまして、本日は会議の前半の段階ということで、まだ十分に議論いただけていない分野に的を絞りまして、議論を進めさせていただきたいと思ひます。

それでは、まずお手元の資料1から3につきまして、事務局の方から簡潔に説明を聞かせていただいた上で、皆様からのご意見をお伺いしたいと思います。

よろしくお願ひいたします。

伊藤企画幹

事務局の伊藤でございます。これまで先生方からいただいた意見・提案の要旨を資料1としてまとめさせていただいております。

<資料1に基づき説明>

文化課長

<資料2に基づき説明>

文化課文化財保護室長

<資料3に基づき説明>

祖田座長

よろしいでしょうか。

というわけで、県内の各大学のサークル活動につきまして、資料が2つあるという、ちょっと私、見落としていまして、余計なことをしてしまいましたけれども。

どうもありがとうございました。

ただ今の説明につきまして、皆様からの意見を参考とさせていただきたいと思います。

まず、資料1をご覧くださいと思います。3ページの、先ほど申しましたが、方向性1と方向性4につきまして、ちょっと議論が必要かということで、まずは、方向性1でございますけれども、ご発言いただく際には、具体的検討を要すると考えられる事項というのが枠線内に書かれてございまして、そういうものを踏まえながら、県の施策や事業につながるような具体的な意見・提案をできるだけたくさんいただければと思います。

まず、方向性1でございますが、資料1の3ページですけれども、具体的な検討事項として、枠囲みの部分に書いてございますけれども、「白川文字学や先進的書写教育の伝統を活かし、これらを文化ブランドとして国内外に打ち出していくための方策」「これ以外に、文化ブランドとしてポテンシャルの高い文化資源にはどのようなものがあるか」という2点が示されております。この2点を中心にいたしまして、具体案をお伺いできればと思います。

どなたからでも、挙手をしていただきまして。

伊藤委員

書写につきましては、前回も少し補足的な意見を申し上げようと思ったのですがちょっと時間が。

前回の参考資料としてこういう本がありまして、今日は持ってまいりましたが、『逆耳の言』というのは石川九楊先生の著書で、「逆耳」というのは「耳に痛い」と書きますけど、我々の文化観の盲点のようなところを大変啓発される、刺激される本になりますけれども、その中に、石川先生が、なぜ福井に生まれて書家になられたのかという説明がありまして、これによりまして、石川さんは今立の生まれなんですけれども、今立で垣内楊石先生という立派な書道の先生に出会って、その先生から九楊一楊石の「楊」の一字をいただいたと。

そういうことを含めまして、文献などを総合してみましても、福井は、私たちがふと思いついたところではない、多分皆さんが意外だと思われるぐらいに、書というものの伝統の深い地域だということがわかります。たまたま、国語力が日本一と、それから多くの方が非常に能筆であるということも非常に伝統であると思います。そして、今日に至るまで福井新聞の年初の書き初め書展がありまして、7万、そういう数の応募があったと。そして、今年の福井新聞の紙面で入選作をちょっと拝見したんですけれども、小学校1年から高校生に至るまで、すばらしい字が並んでいるんです。あ、こういうことをやっているのは、おそらく日本中の都道府県で福井だけじゃないかなという感じがしております。

そして、意外と、現在、活字文化の衰退とか言われますけど、本を読む人、新聞・雑誌の部数がだんだん少なくなっているということがあります。活字というものと、私が言う文字文化というのはちょっと違うものかもしれないですが、その中でもいわゆるデジタルの文化になり代わって、そういう世界が集まるのが、県、地域、あるいは地方の底力を厚くする非常に効果のある道じゃないかということを思い、ぜひ、「書の国福井」という1つのキーワードを考えたいわけですけど、「書の国福井」ということを全国津々浦々に、「あ、福井、書の国だったんだ」という書・文字ということが、文字文化が大切にされる地域だ、県だということがフィットすると思うんです。福井にはもう1つ、繊維ということがあります。これも時間がありましたらまた申し上げたいんですけど、まず今回の会議の目的は文化の創造という意味で。これは、全国に照射する光が、ある文化の放射線が全国に降りかかるような、ある強い光源といいますか、そういうものを持たねばならないと。そのためには、伝統的に強いところを、まず言えるのが、書という

ものは白川静先生の膨大な、世界を圧する漢字の研究がありまして、そして、私淑されたといえますか、石川九楊先生も随分と教えを請うたりしました、私淑とは言えないかもしれませんが。それから杉本先生ですね。そういう伝統のもとにあつて、今日の資料を読みますと、いろんなところで目にする書家ですね、まだ何人かいらっしゃるということですけども、そういう方たちの支援をですね、指導も含め、ぜひ、全国的に照射できるものを勉強していく。

それで、これからは本当の思いつきの段階ですので、笑っていただいて結構です。「書の甲子園」、今、21日から選抜高校野球が甲子園であります、夏の甲子園もあります、「書の甲子園」。

西委員

ありますよね。何年も前から、高校生の「書の甲子園」が。

伊藤委員

そうですね。書の甲子園、第二甲子園で。福井県が主催しまして、おそらく高校生の競書大会です。書の競争ですから、競書大会です。そういうものを催せないかというふうに思っております。ですから、書道コンクールというものとは違ひまして、できればそれぞれの県から優秀な書道の選手を選抜していただいて、福井の会場に来ていただいて、そこで臨書ですね、現場で書いて、幾つかの課題を示して、楷書とか草書とかものすごく多種類がありますから、そういう書の競争大会です。それこそ石川九楊先生ぐらいの方に話をさせていただくのが一番いいんですけど、かなり選手権的なですね、これは昔、江戸時代、もっと昔、そういう競書大会みたいなこといっぱいあったんだそうですが、それを福井でもできないものかと、そんなことを考えています。

ちょっと長くなって申しわけありませんけれども、皆様のご意見を。

広部委員

たまたま、この間東京から山根一真先生がお見えになって、一つこの写真を見てくださいということで、JRの駅で撮られた写真を私に見せていただきましたが、福井駅の構内に子供の書写の字がずっと展示してあるんです。「こんなの、全国どこへ行ったってない」と。私らはそれを当然のように思っているんですが、そういったことだなと。

西委員

見たことあると思いますけども、すごくいいことだと思います。

もうちょっと広げるといふか、かなり広げたいと思うんですけど、なぜかとまず言っちゃうと、いろんな人が目を向けないが一番意味がない。だから、お習字、書道はいいと思うんです。で、書道が苦手だとか、やらないからという参加性を低くする必要はないと思うので。でも仮に白川文字学賞というやつをつくります。その部門がありまして、書はあるんです、当然、それで、それをやる場合にまず県が主催して、漢字を3文字毎年選定するわけです。その漢字一つ一つに、白川先生のご本に書いてある漢字の説明がありますよね、非常に勉強になる、あれを、メインになるかもしれないけども、大きい漢字の下にその意味合いがあつて、その漢字3文字がテーマで、どれを使っても構わないんですけど、それで、1つはまず書道、そこから絵をつくってもいいし、グラフィックアートにもつてきてもいい。その漢字をどう分解してということでもいいし、そこから発想をひねった漫画もあつていいし、小説もあつていい。それで、焼き物、越前焼、いろんな焼き物の中でも字を使ったりする焼き物。漢字からイメージしたダンスとかお芝居、その辺も含めて。後、一番やりたいのはTシャツのデザイン。単なるTシャツのデザインだけで、世界のトップブランドをつくっている日本人がいるわけですから。それは福井の産業にもつながっていく、文化にもつながっていくんですけども、その焼き物につながる、福井の産業にもつながる。福井の企業がいろいろそれを、県が選んだものを後で再利用というか、もう一回使えるということにする。幅広く、自分の好きなものとか応募しやすい、そういうジャンルがたくさんあつたほうがいいと思うんです。

さっきの書道だけでやるんだつたら、書のオリンピックじゃないかと思うんです。世界規模でやらなきゃならん、申しわけないが。ヨーロッパにも習字をやる人がいますし、中国は当然いますけども、韓国みたいに漢字をみんな使わなくなつて、忘れてしまう、どうしようかと、焦つて

いる、韓国の教育の方の上の人間は焦っているんです。ハングルばかりになって、漢字が書けなくてもいいと。中国と韓国は縦書きがなくなっちゃっているんです。全部横書きでしょう、新聞にしても。縦書き文化を残しているのは日本だけなんですけども、そういう危惧している方もいらっしゃるんですけれども、そういうのも踏まえて、いろんな要素があって、いろんな人が応募しやすい、それは高校生とか中学生、一般も全然関係なしに、プロもアマも応募しやすい形にして、最終的に幾つか選ばなくちゃいけないんですけれども、あったほうがいいと思います。そうすると、今はお金のない時代ですけども、小さく協賛していただけたところがいっぱい出てくるかもしれませんし、そうすると、文化というのはそこで核分裂してきたとかぶつかり合っただけで違うものが生まれ、漢字という1つの字からいろんなものが生まれてくると思うんです。それが文化だと思っただけです。というのが、このテーマで1つ考えたことです。

瀬川委員

伊藤さんにちょっと伺いたいんですけど、越前和紙というのがありますよね。越前和紙って、書道家の間ではどうなんですか？ 素材としては。

伊藤委員

先ほど言い忘れましたけども、石川九楊先生のこの本に、今立の生まれで、今立の越前和紙というのが、彼の書に入るきっかけになったということがまさに書いてあります。

瀬川委員

和紙の職人さんに話を聞くと、ものすごくいっぱい種類があるのが越前和紙の誇りだみたいなことを言ってらして、その用途に合わせてどんな紙でも我々はおつくりすることができるみたいなことを職人さんがおっしゃってらして。だから、紙、越前和紙と書のコラボレーション的なこともできるのかなと思ったり。

西委員

実際にやっちゃっている人はいっぱいいるからね。

瀬川委員

まあ、個人的にやっちゃっている人はいっぱいいると思うんですけども。

西委員

それは使えばいいのであって。

やっぱり書と版画、日本画と越前和紙—日本画の場合は絹も使い、布も使いますけれども—最高だっていますよね、だから昔から残っている古文書って越前和紙なんです。あれはがたがたにすくんです。重なってもすき方で空気が通るように。そのすき方が絶えかかっているんです。1軒の家でしかできなくなっちゃっている。それはぴたっとならない。風が通る。そうすると、正倉院にあるような古文書で残るといのは、越前和紙のすき方だけなんです。それが今、1軒の家ぐらいしか残っていない。その家はお嬢さんしかいないけど、お嬢さんが継ぐらしいんですけども、それも文化なんですけどね。

瀬尾委員

白川静先生なんですけれども、これ、教科書等では載っているものなんですか。

広部委員

これ、去年の4月から、小学校に白川文字学を導入した授業を国語の時間に取り入れました。

西委員

それ、すごいよくできていますよね、いただいたんですけども。

広部委員

これ、実は、そのときに半年ほどかけて国語の先生のグループがつくり上げた、本県教育委員会の本なんですけど、毎日新聞の全国版で取り上げられまして、それから非常に売れ出しまして、3,000冊印刷したらもうすぐ売り切れるんじゃないかと。

参考までに、ちょっと回していただけますか。

瀬尾委員

それは、県内だけじゃなくて、全国？

広部委員

ご希望の方に有償配布を。

西委員

だから、それを全国規模で売らなきゃだめなんですよ。それで、県に金が入ってくるけども、それではやっぱ文化は伸びない。

瀬尾委員

県内で、白川先生はすばらしい先生だと、こういう文字学で言っているんですけど、やはり全国規模で、「白川先生ってだれ？」ということになってきたら、やはり…。

西委員

意味がないんですけど、ある程度のインテリジェンスのある人達は知っていますよ。ただ、一般向けは。

瀬尾委員

ですから、子供のときに教科書に出てきた人というのは、ある程度は覚えていますから、そういったところで発信していくべきではないかなと思うんです。

西委員

そういう意味で、大きいイベントをやることによって知らしめることはできると思うし。

赤土委員

先日、今の白川文字学の話なんですけども、福井県の知事と橋下知事で、敦賀で対談をやっていただいたんですが、そのときの話の中で、やはり白川文字学の話が出てきまして、全く知らなかったけども、調べれば調べるほどすごく面白い。どうしても向こうの方の教育の中でやりたいという話が出ていたんです。福井からそういう先生方を呼んで、授業の中でやってほしいなんて話まで橋下知事から出ていましたけども、それぐらい福井の文化というのは外へ広めていくことが必要かなというふうに思っています。

それで、知らない方がたくさんいらっしゃるんです。例えば、アララギ派の伊藤柏翠さんなんかも、私、向こうのほうで、福生の方で仕事をしていたときに、そこの先生が、「福井っていえば、もしかして伊藤柏翠さんのいらっしゃるところじゃないですか」って話が出てきて、その中で私は「アララギ派の仲間なんです」って話が出てきたんです。ですから、そういう知らないところから結構外の方へも出ているというのがありますので、そこをうまくつかんで、外へ出ていく、発信していく1つのものとしてとらえていってもいいんじゃないかなと思います。

竹川委員

伊藤先生から、「書の国福井」というご提案があって、文字文化はということでしたけど、「文字があって書」でしょうね、「書があって文字」じゃなくて。したがって、文字にスポットを当てるという形と。それに、西先生がおっしゃったように、やはり、文字からいろんなジャンルへ発展していくようなことを考えていくのは面白いと私は思いました。連合音楽会というのがあるんですがね、福井市内に、どの市町にもあると思うんですが。中学生の大会で自分の思いを書いたTシャツでステージに出たんです。ほとんどの学校は制服で合唱なんかをするんですけど、あ

る学校はTシャツで出る。それが伝統的になって、Tシャツに自分の文字とか絵、デザイン、いろいろ思いを書いて出ることが楽しみになって、伝統になってきているんです。そういうことで、文字を通して、中心にいろんなジャンルへ発信していくというのはすばらしいことではないかなと思います。だから、高校生とかって限定するんじゃなくて、広く全体に波及できるような方策を考えると、これは面白いと思います。

西委員

日本の文字って海外の方にも魅力的で、欧米の観光客がやたら漢字のTシャツを買いますよね、間違ってるのを。入れ墨を漢字で入れちまったやつに、ここに「恋」って彫っているんだよね、「愛」だったらまだわかるんだけど、その「恋」っていうのはどういう意味で彫ったのかわからないんだけど、やっぱり漢字に魅力を感じているから。この福井県が時代性に合わせて、さっき言ったテーマに戻しますけども、3つ漢字を選ぶのは、今の時代を考えて、例の漢字検定の、京都でやるのがありますけども、いろんな方向性から漢字なり文字を選んで、いろんなアートなりいろんな表現方法として、最終的にTシャツもできて売れたら面白いなど。

伊藤委員

今おっしゃった、私、三十数年前にドイツに居りました時に、ドイツ人の友達が日本の文字で書いた賞状が欲しいと言うんです。ハノーバーで開く大会だったんですけども、その時日本人に頼みまして、日本の文字の賞状をつくってみました。それが参加した人達にもものすごい人気だったんです。名前を書き込むのは日本の女性に頼んで。特に行書体がやっぱり芸術的であるというようにことだと思っんですけど、海外で日本といいますか、アジアの文字、行書の美しさというのを。

西委員

文化の魅力を感じるんですよ。

祖田座長

他にございませんでしょうか。

広部委員

書でも、この間毎日書道展というのを県立美術館でやっていて見に行ったんですけども、字はほとんど読めないです。あれは、一つの絵みたいな、美術として見ればいいんですか。

西委員

女優の若尾文子さんが以前二科展かで、すばらしい、水色の墨で「和」という字を書いていらっしやるので、それが「和」だと書いてあるからわかったんだけど、これはアートですよ、実は僕もそういうのを頼まれて今年もしなくちゃいけないんですけど、テーマを絆で書けということになっているんですけどずっと考えているんだけど難しく。そういう魅力は一方であるんです。今、東京でもそういう書店、書道展をサークルとか小さい形でもやっているんです。若手の書道家がいっぱいそこへ何人か出てきて、OLとかがそういうのを学びに行くんです、主婦とか。後、お店をやっている人たちがPOPを自分でつくるのがはやっているから、絨毯とか、という意味合いもあって、例えば、さっき言った中にPOP—お店の看板ですよ、そういう項目をつくってもいいと思うし。そうすると、さっきの下のほうの、それ以外の文化ブランドという部分に発展してきたと思うんです。

伊藤委員

もちろん、書の世界は非常に広いわけですけども、さまざまなアイデアのイベントができるかと思うんです。私がさっき書の甲子園と言いましたのは、やはり、でも私はNHKに共催してもらったらいいと思いますけど、書を書く迫力というのは、格闘技であるかと、十分映像にも耐える動きなんです。そういう意味でそれを一つ映像として全国に。そりゃ優勝大会とかそういうところで、そういうシーン、そういう1つの鋭角的な行事というものをつくっていく必要がある

んです。何か目立つ行事というものが必要ではないかと思いましたが、どうも失礼しました。

祖田座長

ありがとうございました。またご意見いただきたいんですけども、かなりご意見いただきまして、まだあるんだと思いますが、大切なこと、思いつきでも何でも結構でございますので、ありましたら、またファクスでも何でも、事務局にお送りいただければありがたいと思います。

それでは、方向性4のところに移らせていただきたいと思いますが、11ページから14ページです。11ページの方向性4でございますけども、まずその1についてでございますが、この分野は有形無形の地域文化の再認識、発展、継承、活用の推進ということでございますが、この分野は意見・提案4-1から4-5までのくくりで整理されております。各項目ごとに20分でございますので、皆さんからご意見をちょうだいしたいと思います。

特に、4-1でございますが、「ふくい文化財の全国的評価向上」ということで、これにつきましては、これまで皆様方から具体的な意見をいただいております。

具体的な検討事項といたしまして、枠囲みの部分でございますけど、「いまだ地域に眠る文化財を掘り起こし、活用につなげるための有効な方策」ということが示されておりますが、こうした点も踏まえて具体案をお伺いできればと思います。

大廻委員

実は、丸岡町の近辺は、掘れば掘るほどいろんなものが出てくるんです。ところが、行政というのは、非常に、何といいますか、それに対して抵抗がありまして。丸岡城の石垣の部分とか、そういった礎石の部分がいっぱい出てきたんです。文化庁に聞きましたら、「3か所特定してくれば史跡にしてもいい」ということを主任調査官の方から言われまして。当時、私がそれを県の方へお教えしたら、その直後というか、夕方までにうちの、恥ずかしい話なんですけど、旧丸岡町時代に土木課の職員が、県が見に来る前にコンクリートで埋めてしまったんです。とてつもないことをやる職員が、これは丸岡に限らずいると思うんです。要するに産業と文化財というのはなかなか1つになっていかない。

それから、そういう提案をしてもなかなか通ってこなかった現実というのがありますし、コンクリートで埋めようと何しようと、残っていることに変わりはない。福井大震災によってなくなってしまった歴史的な環境、それから丸岡城は、地震によって壊れたから格下げになって、国宝から重文になったという認識がいまだにあるという。法律が変わっただけなのに、何でそういう認識を持っているんだということがあるので、学校教育の中における文化財が一私は丸岡の人間だから丸岡城がありますが一福井は満ちあふれているはずなんです、目に見えないところで。そういったことも含めて、丸岡町には280基ぐらいまだ古墳がありますから、小さいのを入れると。私が今朝発見したんですけど、お宮さんのところに長持型石棺の一部がどんと立っていたわけです。まだまだ調査が足りないような気がしますので、あまりあほな意見を言うと皆さんにご迷惑がかかるので言いませんが、そういうことが多々ありますので、その辺をもう少し、目に見えなくなってしまっているところを掘り起こして、まだまだいっぱい宝物が埋まっている福井県で、一つずつ引っ張り出してくというのが、先に手をちょっとつける。まあ、長い時間、百年計画。百年計画で丸岡城のお堀を復元していくという案の立案中なんですけど、多分この数年の間に丸岡城ルネサンス百年計画というのを打ち出す予定をしているんですけど、これは百年かけて立ち退いていただいて、お堀を、内堀を復元するという計画なんですけど、ある企業が乗っかってきてくれて、いつ発表できるか分かりませんができるだけ早く発表したいというふうに思っていますけど、そういう、2代、3代、4代にわたるかもしれないけれども、ヨーロッパのように守っていく、そして埋もれてしまったものはエジプトのように掘っていく、そういう精神が福井にあってもいいんじゃないかと。福井には、まだまだ山のように宝が埋まっている。それはつくづく、私が目で見て、さわって感じてきたことで、実感を込めて申し上げたいので、ぜひよろしく願いいたします。

瀬尾委員

私も大賛成でありまして、若狭なんですけども、小浜線に乗っていると、ここにはたくさん宝物が埋もれていると、よく専門家の人たちが言われるそうなんですけど、それを見つけ出す人が

少ないと。どうしても行政に頼ってしまいますので、学芸員とか、やはり人が少ない。地域の人も、これが宝物だというのが分かりませんから、やはりそのところは何か手助けをしていただきたいと思います。

祖田座長

ほかに。どうぞ。

佐野委員

今、埋もれた無形文化財なり文化財ですね、いろいろ調べていけば、いっぱいあるんじゃないかと思うんです。例えば、昨年亡くなられましたけど、オーベックスの三田村会長の家の中に薬師堂があるんです。屋敷仏みないな感じで三田村さんのところが管理していたんですが、4月8日からいつも薬師さんのお祭りがあるんですが、そこの仏像は一丈六尺の仏像なんです。一丈六尺というのは相当なものだけど、まあ、立ち上がればという話で。これは福井県で一番大きい仏像なんです。勝山の太夫は除きますが。県の重要文化財とかそんなことにはなっていないと思うんです。形式的には。ちょっと調べていないんですが、先生、あれはなっていますか。

広部委員

なっていないです。

佐野委員

なっていないでしょう。そうすると、あそこは薬師ですから、現世御利益、体悪いときなど、お参りは結構あって、秘仏扱いになっているんですけども、三田村さんに何度も見せていただいています。とにかく、福井県一、北陸ではちょっと分かりませんが、寄木造の平安時代かというぐらいやと言っているんですが。そんなのは案外知られていないし。

それから、旧宮崎村の役場の近くの後ろの通りのところは江波になるのかね、あそこに岩本観音というのがあるんです。岩本観音というのは、いわゆる磨崖仏なんです。岩に仏様、観音様を十四、五体彫ってあるんです。磨崖仏というと、大分県の臼杵の大きいのを想像しますが、あそこも県内では唯一ですね。他にない。今言った仏さんというのは、江戸時代、飢饉の時に、飢饉で亡くなった人を弔うというか、供養するために彫ったと言われておるんですが、地元の大工さんじゃないと言われていて、それは町のそういう中には入っていますが、案外そんなのがあるんです。

それから、越知山大谷寺。大谷寺の中を文化庁の方で何か調べたら、相当なものが出てきたという話もちょうとあって、まだ正式にされていないんですけども。案外、神社なんかには神仏混交の、仏さんみたいな神像なんかで面白いのがあるんじゃないかと。その辺が、あまり確認されていないんじゃないかと思います。神社関係、神仏混交系は調べると面白いのが出てくるんじゃないかと思います。

もう1つ思ったのは、村に必ず、1集落にお寺と神社が大抵はあったんです。それで、65歳以上が何%になったら限界集落とかの定義があるらしいんですけど、詳しくは分かりませんが、そういう限界集落がものすごく増えているでしょう。後が続かないので、中には全国の、どこの県か分からんけど、神社も家も燃やしてしまったと。朽ちるに任せるのは。小さい祠みたいなものを燃やしてしまうとか。もういい、後はだれも面倒を見られないのならという感じになってきて、だから、そんなのでお宮さんのそんなのを維持するのも…。

西委員

京丹後の奥の方も、村に人がいなくなって、結局全部つぶすしかなくなると。

瀬尾委員

何年前に盗まれているんです。この間、テレビですか、京都でありましたよね、仏像が盗まれたと。そういうことであれば、あることがわかっていて盗まれるというのはわかるんですけども、ないのがあって、分からなくて盗まれているのは。何か盗まれているという感覚しか…。

佐野委員

そうです。ですから、そのこのところはやはり、研修か何かで指導すべきではないかと。

西委員

もっと言うと盗まれてどこかで残るんだったらまだいいですよ。前、一乗谷あたり、今は県はちゃんとやっていますけど、そのそばで農家の方がいらっしゃって、畑をつくるところを掘っていると重要なものが出てくるんだけど、要らないからと割って捨てたとか…。全部捨てているんですよ、必要じゃないからと。それは、今から考えると重要なものが捨てられている、壊されている。それも善意でというのか、悪意がなくてやったりとか。それで、今、福井もいろんなところで開発がすごくて、すき間なくなってきましたから、ぼんぼん出てくると壊しちゃうよね。それは極力早く一例えば県のここも中心になっていいんですけど一土木やいろんなところから先兵隊を出して発掘隊をつくって、この辺はというのは押さえておかないと、怖いと思います。

竹川委員

ちょっと関連して。

今、佐野委員がおっしゃった仏像、埋蔵している、地下に埋まっているものと、地上にある観音様みたいな、薬師神社にあるようなのと、ちょっと区別したほうがいいと思うんです。僕も横に薬師神社があるんです。ところが、十年ほど前かな、僕が自治会長をしていた時にある学生さんが来られました。県外の大学院生だとおっしゃっていました。「どこの大学？何しに来られたの？」と言ったら、全国のあらゆる薬師神社を研究・調査しているんだと言うんですよ。薬師神社というのはそんなに多くはないんだそうです、全国的には。だから、そんなに多くはない、だから、これは珍しいんですって。ところが、私はあまり関心がありませんから。そこに石像みたいなものもあるんですよ。本尊は木像なんです。その横に石があるのね。これも見せてくれて、それでその人が読むんです。何て書いてあるか、いつごろできたとかというようなことを。よその大学で、県立大学ではごさいません、県立だけでも。そういう調査を一回、少なくともまずは一埋まっていることも大事かもしれない、ちょっと分かりませんが、地下に埋まっているものを捨てることもあるかも知れないけれども一目に見えていますから、観音様なり薬師神社の仏像は、そういうものを一回調査して、これは価値があるとかないとかいう判断を、それは地域ではできませんね、プロでないと。そういうものを一遍調査するという目に目をつけられたら。これは、行政でないとできませんので。

祖田座長

各集落の情報を寄せてもらわないと。そういうことが必要ですね。

西委員

おじいちゃん、おばあちゃんに。

祖田座長

聞いてそれを集めて、そこから次のステップという。

竹川委員

特に、若い子は全然関心ありません。

西委員

それを、おじいさん、おばあさんに子供たちが聞いてくるという宿題が始まっていてもいいと思うんです。「この村にはどんな神様がいたの？」とか「どんなことがあったの？」というところから始まっていても、教育の部分にも活かせるし、文化の部分にも活かされると、それは上がった段階でプロが見れば、これは生きているものがあるなというのは容易に感じますから。そうすると全体にわたって教育・文化という今回のテーマには合うと思います。

竹川委員

そういうマップづくりの研究を子供に投げかければ、一生懸命自分たちで探して。おばあちゃんたちに「この町内の神社はどこにあるの？」とか。

西委員

その地区で一番の長老にみんなで話を聞きに行くというだけでもコミュニケーションが生まれ、おじいさん、おばあさんも元気が出るし、全てよくなると思います。

祖田座長

まず調査に入っていくとありましたので。

まず調査をとという話もありましたように、1つだけ今思いましたのは、実は小浜、若狭湾に、七、八百年ぐらい前のつり鐘が埋まっているというのがはっきりしているんです。韓国から3つ当時持ってきたと。その3つがどういうわけか、若狭湾に入ってから多分船が揺らいだのか、湾に落ちてしまったと。2つは揚がって、新潟とその他に。1つは海底に沈んでいると。明治の時期ですかね、魚網に引っかかって揚がったんだけど、また落としてしまったという記録がはっきりしていますので、もしこれが揚がってくれば大したものじゃないかなと。金持ちになるんじゃないかと。

神仏混交の話が出ましたが、私も八百比丘尼のことをいろいろ調べておりまして、それはまさに神仏混交の体現みたいなものなんですけど、神仏混交ということのはっきりしたものは、分かっているのは小浜の神宮寺だけだというふう聞いておりまして、そういうものがこの福井にあるというのは大変素晴らしいことだと思っております。そういうことも含めて、いろいろたくさんあるんじゃないかという気がいたしますので、今日の意見を参考にさせていただければと思います。

それでは、この他に4つございますので。

広部委員

すみません。

丸岡城の国宝の話がさっき出ましたけども、私どもも今、丸岡城をぜひ国宝にする必要があるということで、いろいろ…。

西委員

実はあそこの木材うちが納めたりしております。

文化課文化財保護室長

今のお話の丸岡城なんですけども、建造物だけではなくて、今、大廻委員からもお話がありましたけれども、周辺環境も含めて、堀の中に浮かぶ丸岡城もなおよろしいかと思っておりますので、今日もお昼前ぐらいに坂井市に文化財の関係で参っておったんですけれども、調査を実施して、先ほどのお話にあるように同意を得ながら、史跡の方での指定を含めてこれから検討していくということで、2週間ほど前ですか、国の調査官にも来ていただいて見てもらったりしておりましたので、これから徐々に、先ほどのお話にもありましたけども、時間としては相当な時間がかかろうかと思っておりますし、その上に住まれている方もおりますので、少しずつ環境を整えながら進めていきたいというふうに思います。

佐野委員さんから先ほどちょっとお話がありました磨崖仏のことなんですけども、江波の磨崖仏は、私はちょっと知らなかったんですけれども、後、永平寺の入り口のところに、おそらく中世だと思っておりますけども、磨崖仏がありまして、それについては永平寺町のほうで拓本をとって、たしか展示もしてあったかと思っております。

後、朝倉の登山道途中に仏像ですけども、戦国の磨崖仏があったと。

祖田座長

では、次に行きたいと思っておりますが、4-2に移らせていただきます。「衰退する民俗文化財の保存と継承」ということでございます。

具体的な検討事項といたしまして、枠囲みの部分でございますが、「衰退していく無形民俗文

化財の保存・継承を地域住民に普及啓発し、保存・継承活動への積極参加を促すための具体策」ということが示されており、こうした点も踏まえまして、具体案をお伺いできればと思います。よろしくお願ひします。

佐野委員

民俗のそういう行事ですね、例えば正月にいつも新聞に出ている敦賀の綱引き、あれは西町と東町に分かれてやっていますが、あれは縄をなって全部地元でやっているんですね。そしたら、あの縄を確保するのも大変で…。わらを確保して縄をなうと、あれがまずできんようになってきたと。人手も高齢化していないし、経費もなかなか維持できないと。経費もかかると。そして、げんでんふれあい福井財団からずっと支援で助成金を出しているんです。げんでんは3年までなんです、だから、ああいう民俗文化財はちゃんと継承しようということで、継続して出しているんですけども、後継者もいなくなって…。この間もちよっと議論になったのは、あのわらを商品化して、お参りに来た人、一みんな、写真をぱっぱぱぱ撮ってる一ちよっとカンパ金を集めるとかそういうことでもしないと。交通渋滞をおこすほど、すごくいっぱい人が来て、楽しむだけ楽しんで帰って…。だから、見る人も協力してもらわなあかんというふうな発想も必要なんじゃないかということで、そういう議論が1つあるんです。

西委員

後、わらに御利益があるということをうそでもつくりないと…。結婚できるとか、買った方が今年は成功するというふうな、お守りになるとみんなで言わないと…。そうすると、途端に変わると思うんですけど。

佐野委員

わらの文化が失われているでしょう。昔はわらでいろんなものをつくったけど、それがなくなっている。そんなのは民俗でも何でもないんだけど、生活文化として継承していかなあかん部分はあると思うんですよ。そういうものがベースとして失われているのが問題です。

そういう意味では、参加する、見に来る人も金を納めるような、年貢じゃないけど。

西委員

それは全体に言えることだと思うんですけど、そういうことって、今の若い人を中心に考えると、格好よく見えるか見えないかということが大きくて、例えばお祭りをみんなあまりやらなくなったというけど、東京じゃ三社祭とか、人が集まり過ぎて、実は浅草の人間たちは困っている、やりたくないという状況が…。おみこしの上に乗ってしまったり。神様が乗るところに乗るのは禁止だっているのに、あれをやるやつは全部浅草の人間じゃない人たちがやってしまうんですけども、それぐらい人が集まってしまうものも生まれているんです。

祭りというのは、昔、いろんな要素があって、神に感謝とかいろんなことがあるんですけど、コミュニケーションの場で、男と女の出会いの場所であったりとか、支配階級から見ると祭りで金を使わせてしまってまた貧乏にするという要素とか、いろんなのがあるんですけども、そういうのは時代に合わなくなっている部分があるので、どうおもしろく格好よく見せるかというのが一番難しいと思うんです、これ。

広部委員

我々も時々議論する中で、1つ課題があって、これはどうかと思うのは、例えば越前萬歳、仏舞にしてもばかばやしにしても一特に越前萬歳なんかは非常にすぐれているんですけども、やっても何をしゃべっているかさっぱりわからない。どういう意味があるのか、何をしゃべっているのか全然聞き取れんと。そこらあたりを現代風に直してやったらどうかと。三河萬歳なんかはそんなことをやっているんです。それも方策かなと思いますけど。

西委員

オリジナルと現代版というのも必要だと思います。オリジナルは大体残さなくちゃいけないと思うんですけども、現代人が分からないのも困っちゃう。

瀬川委員

今、私、福井新聞の雑誌で、月に1回県内の祭りを見に行く企画をやっているんですけど、確かに後継者がいないという話はあちこちで。後継者がいないというか、若い者自体がいないとか、そういう話は結構聞きますけれど、その一方で、例えば三国の安島のお祭りなんかだと、若い者が中心になってやっていて、何が違うかという、参加している若い人が、「おれら、格好いい」と思っているんです。「この日のためにおれらはやってるんや」という、ちょっとうざいぐらいすごい誇りがあって。その1か月後の三国祭りなんかも、遠くに行っていた人が「その日だけは、おれは帰ってくるんや」という感じで帰ってきて、「お祭りの日のおれは格好いい」というのがものすごく感じられるところは、やっぱり後継者がちゃんといるんですよ。

西委員

岸和田にしてもそうだし、博多にしてもみんなそうですね。

瀬川委員

だから、やっている人が、自分らがすごく高揚する経験をしないとだめなんだろうなというか。ある祭りに行った時に、わりとお年寄りの人が、「こういう祭りというのは、現代の価値観ではかったらばかみたいなことなんや。そんなもん、お酒を飲んで酔っ払って、裸になって水の中へ入るといのは、今の価値観から考えたらそんなもん体に悪いに決まってるし、ばかみたいなことなんやけど、そのばかみたいのことをやるのが祭りなんや」というようなことを言っていて。確かに、どこか異常な世界だと思うんです、祭りって。どこか一線を越えちゃって、ハイになって自分たちは格好いいという、そういう体験をどこかでしないと、あんな割に合わないことをやっていこうと思わないんじゃないかと思うんです。

赤土委員

今の三国祭りもそうなんですけども、やはり家々の文化的な感性の持ち方によっても全然違ってくるんじゃないかと。ハイで動くということももちろん、町によっては、祭りによってはあると思うんですが、三国祭りのように、逆に昔の文化というのはそれが根づいているという中で、祭りをやる時家の中で、昔つくった山車を出してみるとか、江戸時代からずっと続いているようなものを玄関先に並べてみるとか、そういうところもあるんです。それは、一人一人がそういう感性を持っているというか、ない町とある町の違いはそこにあると思うので、例えば三国とか金沢とかはそういうのがあるだろうと。それが無い町というのはどうしても消えてしまっている。そして、山車をつくるにも、今、自分たちでつくっても150万ぐらいかかるんです。外へ頼めばもっと高くつくんですけど、それを毎回毎回町内ごとにつくり上げていく、これが文化を伝承できているというふうに思うのと。それから、お囃子ですね。これは小学生たちが、2か月ほど前からきちんと練習をしてやっているというのは、やはり皆お囃子をやりたいという気持ちにさせていくというのにも必要かと思えますし、またそれをつないでいる、教えておられる人たちが残っているということ、これもやはり大事だと思えますので、そういう人たちを残していけるような場をつくっていく、そういう町をつくっていくということから始まっていかないと、こういう文化というのは継いでいくことができないんじゃないかと思えます。

西委員

ごめんなさい、ちょっと質問だけ。

そういうお祭りのお囃子を学校でやっていたりしているところはあるんですか、その地区の学校単位で。

うちの子供たちが行った豊島区の高松小学校というのは高松太鼓という太鼓があるんです。学校の中でやって、運動会の時にそれを発表するんです。だから、それを常に練習している。後、夜とかに、地域の人たちがやっているのに参加している子たちもいるんですよ。太鼓同好会みたいなものもあるんですけど、運動会でその地域のものを、お祭りだけじゃなしに発表するというのもやったりするんです。そうすると、相当慣れてくると、その段階で子供たちはリズムをとれちゃうんです。

広部委員

さっき申し上げた越前萬歳なんかは、地元の学校のクラブ活動でやっています。

佐野委員

結局、民俗のお祭りも含めて、行事の継承というのは、その村だけの伝統のもんやでやってきて、これまでは村で伝えてこれた。だけど、後継者がいないと。それから、金も限界が来た。そうすると、そこで発想を変えて、先ほど瀬川さんも言われたように、バイトでおみこしを担ごうとするんじゃないかと、意気に感じた人たちが参加してやるというような、祭りを開かれたものにしていくと。去年の安島祭り—4月20日の春の祭り、あの時なんか、テレビで来ていたゲストの人も裸になって一緒に海に入っていた。

瀬川委員

パンチ佐藤が入ってました。

佐野委員

やっていたから。あそこの松村館長は、いいよ、いいよと。昔からのものにこだわっていると、なかなか。そういうようなので結構盛り上がっていきこともあります。みんなに開かれたものとしてやっていく。それから和久里の狂言、あれなんかは新村と旧村、要するに新興住宅街、そこも参加しているような体制になっている。資金的なものは援助を受けて、参加もしてくださいと。そういう広がりを持って継承していますので。旧村だけやったら続かないと思います。やっぱり、新しい人も加えていくとか、それから資金を参加者から集めるとか、いろんな方法で伝えていくというのが大事なんじゃないかなと。昔は1集落1神社1寺院という感じだったんです。だから、若狭もそれを守られているんです小浜市内なんかは23区、全部神社名。住吉とか白鬚とか、神社1つずつあるんです。あれは明治にできたらしいんですけど。そういうので、きちんとした体制をとれているところと、もうそれができないところがありますので、そういうところは、文化財ってそんなに価値がないというふうに見られるけども、昔から続いている面白い行事がいろいろあるよと。それがなくなってしまうと。調査で拾ってみると、いろいろとあるのではないかなと思うんですけど。

瀬尾委員

やはり、各集落で困っていると思うんです。どうしていったらいいか…。今まで続いてきて、先ほどから話に出ていますように、子供たちがいなくなって継いでくれる者がいなくなる。どうしていったらいいかと弱っている。ただ単に困っているだけなんです。後はどうしていったらいいとか、他から手助けが欲しいんですけども、言っていくところがないんです。隣の集落へ、祭りをするんで手助けしてくれと、それはできるんですけども、ずっと囃子とかを習って教えていくためにも、困っているんだけど、誰に相談していいか分からないと。ですから、今回、集落でアンケートみたいなのをとって、どういったことで困っているんだろうかという、困った同士で集まっての話し合いというのも必要ではないかなと、横のつながりといいますか。

この間話をしています、日向の水中綱引きがありますよね。あれは、30代、40代が中心だそうなんですけども、50代になっていって危ないんじゃないかと。若者はいるんだそうです。いるんですけども、その家庭のお父さんが参加しなかったと。ですから、その子供も参加しなくなってきた。結局、今まで参加していた40代、50代の人が、「還暦を迎えてもしなきゃいけないんじゃないか」と。だんだんそうってきているらしいんですけども、今、佐野さんが言われたように、広報と言うんですか、よそから来ている人に参加してもらおうとか、そういった意見を。「よそから来た者は絶対に入れないんだ」という、そんなのであったかは知りませんが、そういった1つのアイデアでできるのであれば、やはり皆さんでつながりを持ってやるべき。

西委員

文化課にお祭り110番をつくっては。

佐野委員

町内会でも議論になったのは、田舎の没落で、限界集落で困っているということで、畑が荒れている集落があるでしょう。そういう村、そういう集落とで町内会の姉妹町内会というか、そんな提携をしてお互いに交流する、それやったらどうかという話をしたんです。誰がするんだと思ったら、年寄りばかりになってきて、若い人が動かないと…。もっと、そういう意味で一姉妹都市とかって結構やっているけど一姉妹町内会あたりから、村と町と団地と旧村が提携して、その代わり山へ行って畑を体験して、収穫は私らももらうと、そういう相互にメリットがある形でお祭りも自らするとか、何かできるんじゃないかと。

西委員

団地族にとっては歴史のある文化はないから、魅力あるはずですよ。団地だけでおみこしをつくって子供みこしをやるという小さいやつよりも、歴史ある、魅力ある、そこをくすぐればいいんです。

佐野委員

案外可能性はあるんじゃないかなと。

瀬尾委員

そういうところで1点。

祭りの時間の流れ、歴史ですね、それが全然分からない。分からないのに伝承していつているというふうな、その寂しさというのがあるんです。僕も50代、60代になってきますと、何で伝わってきたんだと、それを知りたいというのがやはり出てきますし、そこの流れも聞きたいなと。

西委員

大切に作る仕方が変わりますよね。うちの実家のある丸岡で、家の前に小さい小川があるんですけど、それを調べていたら990年前にできた用水なんです。そう思うと、これは粗末にしちゃいけない大切なものだと思う。それと同じだと思うんです。

竹川委員

現場へ出て行って指導してあげようという人もいるだろうし、困っている地区とか町内もいるだろうと思うので、だからその実態調査をしないことには難しいのではないかと。例えば、他にも雅楽があります。私も、ちっちゃい子供のころ、うちの兄が龍笛を吹いて、町内にあったんですよ。ところが、いつの間にかなくなってしまったんですが、それも結局高齢化したり、指導者がいなくなったりしたんです。それらも、広い福井県ですから、雅楽をやりたい人もいると思うんです。東藤島にあるとか、どこどこの神社にあるとか、そういうことをみんなが分かれば、「龍笛を習いに行こう」「笙を習いに行こう」「箏を習いに行こう」ということにもなるかと思うので、どこへ行けば習えるのか、やれるのかという調査、そういう情報がぜひとも必要かなと。

西委員

110番に電話すると教えてくれる。

竹川委員

そうそう。最終的にはね。

西委員

神社でも、ここはどういう神様かわからないで手を合わせている人がいっぱいいると思うんです。八幡宮はどういうものかとか、それはどういうものかというデータの的なものでいいから教えてほしいもの。さっきと同じだと思うんですけど。

祖田座長

おじいちゃん、おばあちゃんに聞いて、子供たちが資料を集めてくる。それをどなたかがおまとめになる、いいんじゃないですかね。

いろいろご発言いただきました。次に行かせていただきたいと思います。

次は、4-3の「指定済み文化財の活用を推進」でございしますが、これについてはこれまで皆様方から具体的な意見をいただけてないわけでございます。

具体的な検討事項としましては、枠囲みの部分でございしますが、「文化財を地域文化の中核資産として保護し、適切な保存・修理の整備を図るための有効策」といった点を踏まえていただきまして、具体案をお伺いできればと思います。よろしく願いいたします。

赤土委員

指定済みの文化財なんですけれども、三国の森田銀行ですね、これは国の指定を受けていまして、有形文化財という形をとっているんですけども、指定文化財も、いかにして利用するかということが一番問題だと思います。あその場合、いろんなコンサートをやったり美術展をやったり、そういう形でやっています、すごく使われている。それから、それだけだったら絶対にだめだったと思うんですけども、それをやったことによってあの周り一帯が1つのまちづくりとしてきちっと固まってきたというか。今はあちこちからもすごくいい評価を受けているんですけども、日曜日とか土曜日になると結構たくさんの方が来ていまして、バスが近くに横づけされていて、そしてたくさんの方が町の中を歩いているんです。これっていうのは、やはり一番重要じゃないかと思います。これは、本当は解体直前に私が前を通ったために、その中にはめられてしまったというか、残したんですけども、そういうきちっとしたいものを残していくことで、それをたくさんの人に見てもらえるように、そしてたくさんの方が使えるようなものをつくっていくと。まちづくりというのは、私が思うのは、100メートルできればそれは絶対成功だと思います。その後は、ほっといてもきちんと広がっていく。ですから、点と点をいかにつないでいけるか。そのつなぎ方の問題をきちんとしていくとその活用というのができてくるんじゃないかと思います。

祖田座長

他にいかがでしょうか。

伊藤委員

今の部分のお話は、若狭について当てはまると思うんです。国宝級が一番蓄積しているのは若狭だと思います。今、車というものがありますからそんなに苦労はないわけですけど、京都でしたら北大路のところがあってと、固まりが見えるんですけども、若狭の場合、狭い地域に広く分散しているというふうな感じがありまして、私なんか好きで幾つかの寺へ行くんですけど、ところがどこへ行っても終わりになってしまいます。もう少し若狭の、文化財以外の観光、中核的な施設でもいいと思うんですけど、そういうふうにはできないかと、今日、若狭の長谷委員がお見えになっていませんが、嶺南というよりも若狭地域、小浜周辺ですけど、敦賀の方はよく分からないですけども、どなたに聞いても案内していただけるとか、若狭の方というのは非常に郷土愛が強いですから、聞けば何とか教えてくれるわけですので、少し観光地としての体制みたいなものをもう少し増やす必要があるんじゃないかと思います。

赤土委員

今の話の続きで、つなぐんでしたらやはり食でつなぐというのが一番だと思うんです。三国の場合は蟹で皆さんをつつてまして、蟹でつるとみんな横歩きをしてちゃんといろいろ見て歩いてくれるんですけども、やはりそういうやり方というのが一番いいと思うんです。それから、若狭だったら若狭のフグを食べに行くとか、そういうことでもっとあちこち声をかけて、観光連盟も含めて一緒になってやっていく。そうすれば、途中であそこあそこを回ってからここへ来て食事をしよう。食は文化ですから、おいしいものをたくさん、珍しいものだけじゃなくて、普段地にあるようなものを食べさせるという方法も1つだと思いますので、やはり文化は食でつくるのが一番かなと思います。

佐野委員

若狭のお話だから、あそこは平安時代の古い仏像もあるし、建造物もすばらしいものがある。だけど、それを見に行くだけでは、見に行ったというだけのものでしょう。今おっしゃっている食とか、それから観光と、もう1つは学術的な、例えばシンポジウムをセッティングするとか。前から疑問に思っているのは、何であの狭い谷に、檀家が二、三軒しかいないようなところに、あの三重塔は何で維持できるんやと。そこらのことですよ。何であんなのができたんやろう、あれを解体修理してたら何十億とかかる。平安時代、あんな時代に、それ相応の金がかかるわけでしょう。あんなところでできるはずがない、田んぼも少ない、あんな山の中でという感じです。誰か研究している人がいるんでしょうけど、京都の文化が来たとか何とかって、来たのは分かるんだけど…。

西委員

パトロンがいたでしょうけども。

佐野委員

パトロンがいたんやろうと。それで、大工さんもないあかんし…。誰も研究してないんやろうね、してる人はいるんでしょうけど、そんなのを例えば民俗学者やいろんな方が、木造建築、伝統建築の先生方を呼んできてシンポジウムをして、なぜこの若狭にこれだけあるのか、なぜそういう仏像があるのかというシンポジウムをやってみたり、そういうイベントと観光コースと食コースをセットにするとか、そうすると認識が広がってまた来たいなという。

西委員

泊まる場所ですね。福井は旅館が少ないでしょう。

佐野委員

だから、起爆剤というかね。

伊藤委員

京都と若狭とはどう違うか。門前構えですね。お宮地区。食という場が少ないですね、そこでいろんな会話をする、それが楽しみになる。お寺を見て、仏様を見て、それでぱっと帰っちゃうんです。やっぱり、食でつなぐような機能が必要なんですね。

西委員

東京の向島に長命寺というお寺がありまして、それは江戸時代に吉宗が桜を植えた。門番が桜の葉っぱで桜もちをつくるわけです。それで茶店をつくって、それが桜もちの始まりで。そこは年がら年じゅう桜もちしか売ってないんだけど、それだけでも違ってきちゃいますよね。

それで、食で言うと、昨年ちょっと今庄の宿場町を見に行ったんです、何かネタにならないかなと。今、全国的に宿場が人気なんですよね、馬籠しかり、各地の。あの斜めの道というのは非常に気持ちいいですよ、宿場町の。ただ、住んでいる人たちは、いろいろ理由があるんだと思うんだけど、モダンなお家をつくられたりとか、町を壊そうとしていますよね。せっかくあれだけあるのにもったいないなと。まだ、小浜の方が気がついて一生懸命やり始めていますが、今庄も、やっぱりあそこはそばがうまいわけだから、それだけでも違うと思うし。

大廻委員

食の話じゃないですけど。

去年の夏、2、3週間ぐらい子供たちが文化財の施設の中で授業をやったんです。これはもちろん開明学校というところでもやっているし、それから単なるお寺でもやっているんです。子供たちが学校から比較的近い文化財の中で授業を受けている。冬の寒い時は無理ですけど。そういった時に、子供たちの感覚として、文化財に接する一番いい機会なわけです。子供たちにちゃんと説明して、普通は見られないところを見せてあげるとかですね。そして、そこで基本的に普通の授業をしてしまう。例えば、算数の授業をお寺の中でやってしまうとか、寺子屋風に演出して

みたりとか。

そうすることで随分子供たちが一子供たちに実際に聞いたんですけど—「おもしろかった。あんなお寺の中ですると思わなかった。うちのばあちゃん、じいちゃんがお寺へ行くって言うけど、何しに行ったかよくわからなかったけど、僕らはここで授業がとてもおもしろかった。よくわかった」と。だから、お寺の中でやった算数はよく覚えられるけど、学校でやった算数はちっとも覚えられないと。何か歴史の持っている強さみたいな、力みたいなものがあるような気がします。それを参考になさって、福井も幾つか試験的になされたらどうかという気がします。

西委員

終戦の時、地震の後、お寺さんが潰れたから学校に設けたらしいですけど、子供たちは非常に喜んだんです。地震の後でみんな大変なのに、お寺って遊ぶ場所でもある、そういう要素もあるから、お寺はただ手を合わせるどころじゃなくて、そこでいろんなことを習った、遊びで学ぶ場所であるという。これはやっちゃいけないということも教わる、そういうこともあっていいよね。

大廻委員

ただ触っちゃいけないとかね。今の美術館なんかで、「あれは触っちゃいけない」とか、そういうのじゃなくて。3週間前、アメリカに1週間ぐらい行ったんですが、美術館を幾つか見ていたら、みんな触れるんです。どこかの大臣みたいに登っちゃいけないんですけど、大いに触ってくれというんです。だから、触ることが美術館であり、触ることが科学、触っちゃいけないのは絶対触っちゃいけないので。触っていいものもあるわけです。だから、それは主に触ることによって実感して、そして刀の重さなら刀の重さを実感する、それが文化だと。子供たちがそういったことを学べた。僕は、本当はやっちゃいけないことを昔やって。子供たちに日本刀を持たせたことがあるんです。もちろん、子供1人ずつ刀を持たせて、私が後ろにいて、私が持って子供たちと一緒に。一瞬ですよ。ほんの3秒ぐらい、重さを実感させるんだけど、本当はやっちゃいけないことをやったんですけど、それを今だにその子たちは、大学生かそれ以上、社会人になっても、「ものすごく面白かった」と言ってくれる。それが教育の原点になる。歴史の重さをお子たちは感じたのかもしれない。

竹川委員

随分、今は体験学習の機会も増えてきたんじゃないかと思うんです、総合的な学習とかいろいろ科目が増えてきましたから、一時とは違ってかなりの体験学習が増えてきていると思うんですが、文化財とか文化に関わるところまで手が伸びているかどうかは分かりませんが。

西委員

遠足という字面通り歩かせる、文化財があるところを。それで、さっき言った宿場を通れば良いと思うんです。

竹川委員

今日は、義務教育課や高校の先生ではなく、文化課、教育政策課のほうですから、学校教育関係の先生がいらっしゃれば、中身についてお話がいただけるのですが。

西委員

ここで新田義貞が死んだとか、遠足だったらできますよね。それがなぜ、新田塚はあっちの方に行っちゃったとか、九頭龍川わたっちゃったとか、そういうのがあるんで、実感が非常にわいてくる。それは、やっぱり、お地蔵様1つでも、ちゃんと説明してあげると面白いと思うし。

竹川委員

子供たちはかなり研究していると思いますよ、そういう総合的な学習の中では。

西委員

観光地にもなっているという要素をもっと出してほしい。福井は分からないですけど、東京な

んかには中高年がデジカメを持って外を歩くというのがここ10年近く人気で、特に団塊の世代の人たちがリタイアしてまた増えているわけです。一眼レフのデジカメを持って、女性も男性も、簡単な山から東京の中の江戸風なところとか、そういういろんなところを歩くんです。そうすると、福井の中でもそういうマップでもいい、実際あると思うんですけど、もっとその辺を刺激する方法があれば歩くと思うんです。

大廻委員

海外でも落書きなんか減ると思うんですけどね。なぜ落書きをしているのが悪いのかという感覚が、今の子は分かっていない。

西委員

物を作れないから落書きしていくわけです。重要性が分かる、物を作ったことのある人間はそんなに大切な物を割ったりしないし、できない。子供は分かるんですよ、作った経験がない。それが中学生、高校生、大学生になってやるというのはあまりにも幼な過ぎる。物を作ったこともないし、与えられたことしかないんですよ。

瀬尾委員

文化財等の知識とか広報ですけども、今、語り部ってありますよね。それは、県のほうは把握されておられますか、そこのところは。あるいは全然違う部署なのかもしれないけど。

持田課長

観光関係では把握しています。ボランティアで。観光連盟の中に持っていますので。300人近くの方が登録されています。

瀬尾委員

そこのところと少し提携して、本当の学問的な知識も少し出したりして、語り部さんを有効利用して、見て回った人に説明すると、やはり興味もわいてきますし。

西委員

福井検定をつくってほしいんです。福井のいろんな、文化のこと中心でいいんですけど、福井検定という、ここずっと何年か、検定物がはやっていますよね。福井今いっぱい話題になっているから。福井の県民が受ければいいんですけど。検定試験。

赤土委員

ある程度、町ができてくると、結構語り部というのがやりやすくなるというか、そういうことがあるんです。三国のことばかり一私、三国なのでそんな話になるんですが、三国なんか最初はいなかったんですけど、森田銀行を中心にした街並みがきちんとまとまってくると同時に、それをすごく勉強してやり出す人というのがたくさん出てきているんです。ですから、やはりそういう語り部というのは、語り部というんじゃなくても、常時、話しかけるとその人がそばへ寄ってきてとか、話しているところへ寄ってきてとかという人は意外とたくさんいらっしゃいますので、その中でこれはこうだったとかという話からだんだん広がっていくと。なので、そういうことも必要かなと思います。なかなか、そこへ行くまでの間が大変だと思うんですが、一人一人が勉強していればいいんですが、なかなかそういうわけにはいかないの。やはり県の方でも、例えばここではこういうことをやっていますというマップがあるとかその辺があれば、また外に対してそれをアピールすることができると思うし、それから福井県内の人もそんなに行っているかというとなかなか行っていない人もたくさんいらっしゃるの。県内の人たちにもそういうところへ顔を出してもらって、熊川宿なら熊川宿へ行って、あそこを歩いてみたらとかいうことから広がっていてもいい。でも、熊川宿へ行っても、さっきの話じゃないけど、食べるものがないんです。ちょっと泊まっていくぐらいのものがあるといいと思うんですが。

私も今、都内から建築家の有名な人たちを毎年10人ぐらい連れてきて蟹会を開いているんです。蟹会のときは絶対そこへ行こうと。都会にいと、皆忙しい、忙しいで集まらないんですが、

その時だけ時間をつくってくれて集まってくるんです。食べて、飲んで、いろんな話をして、最終便でやってきてとか、ちょっと前に来て観光して街中を見て入ってくる。そして、食べて、朝一で帰るとか、朝ちょっと時間をとってその辺を回って帰るとかっていうのが多いんです。ですから、そういう場として引っ張ってくるということも、食としてやってもいい。それを、じゃ、役所が金を出すかという、それは金を出してくれるわけがないので、やはり自分たちで出してくてるような場をつくってあげる。

大体、こっちへ来られる方というのは、蟹でつると大概来ます、5万円も出せば。この前黒川紀章さんの時だって5万で来てくれたとか、大体皆さんそういう感じで、隈さんなんかも最近有名な建築家なんですけど、結構毎年来ている。皆さん、大体5万円という金額で、交通費込みで来てもらうという。蟹でつるといって、こんなにすごい文化はないんじゃないかと、人を寄せるための。だから、それをまた利用していてもいいと思いますけども。

西委員

期間が限定されちゃうけどね。

祖田座長

ありがとうございます。

それでは、後2つ論題がございますので、次へ行かせていただきたいと思います。

次は、13ページの4-4でございますが、「地域や文化団体による地域文化の魅力向上、継承、活用、普及の推進」についてでございます。

具体的な検討事項としまして、枠囲みの部分でございますが、「地域に受け継がれた地域文化（文化財や食、祭り、風習等に代表される生活文化）を、地域を挙げて磨き、継承し、地域づくりにつなげていくための効果的な取組みに対する支援策」ということでございます。こうした点を踏まえていただきまして、具体策をいただきたく思います。

伊藤委員

続いて、若狭のことになりますけども、私、10年ほど前、県立大学で教員をしておりましたころ、小浜キャンパスに何回か通いまして、その時に、若狭の方たちと随分知り合いになりました。その時にそこでできた友人たち一今では私と同じぐらいの、70代、80代になっていらっしゃるんですけど、私の県立大学最後の年、1999年に、若狭の方たち、私の知り合いの人ですね、若狭の産業、文化、寺社、祭事、お祭りとか、とにかく若狭にある自分が知っている、あるいは取材して、オープンカレッジの一環としてやったことがあります。それは1998年、99年の時ぐらいですけど、残った友人たち、本当に、これは越前・若狭に通じて言えることだと思いますけども、皆、やっぱりこの方たちは好学とか、学を好むとか、学を取るという気風がありまして、その人たちはその後も次の2年をかけて、今度私は多少の添削をしたぐらいなんですけども、立派な第2集を出して、それが2000年、2001年です。昨年、第5集ができております。「若狭の記録」というのが第5集まであるんです。これよりも少し大きい判で、おそらく200ページぐらいあります。それは本当にそれぞれ手弁当でやりましたから。手弁当と印刷費用ですね。おそらく、1人1万円ぐらい出したでしょうか。全く県費を煩わさずに。

しかし、これは若狭の現代に至る、理屈なしに非常に細かい、例えば、今では若狭ではなくなりましたけれども、和傘ですね、昔の蛇の目傘。この傘産業というものは若狭の大変な産業の1つだったらしいんですけども、その最後の和傘職人に聞きまして、傘の作り方を絵入りで説明しています。例えば、ほとんど消えかかっている、大漁旗。今でも漁船には大漁旗を積むのかどうか知りませんが、大漁旗の旗を描く職人さんとか、全く今もってみればやらない、そして、ついこの10年ほど前に消えてしまった、地域文化、これを記録したものを5冊、今までずっとやってきたと。これは若狭という1つのまとまったところにそういう好学の同志が集まってできたものなんですけれども、やはりある地域の歴史について厚い記録があるということですね、あの文献にはこれがあると、そういうことが揃っていると、できるだけその網が深いところまで。その地域の文化の尺度じゃないかと思うんです。そのために、そしてそれを地域の人たちが地元のこと、自分の関心があることを調べてやるわけですから、ほとんどお金がかからない。ああいう「若狭の記録」で体験した文化の保存というか、やり方、伝統みたいなものをできるだけこの

福井県のいろんな地域に広めていくことはできないかなということを考えております。

祖田座長

他にございますでしょうか。

大廻委員

東北で、多分語り部として一番有名な人が1人います。88歳ぐらいになって、全国を回るんだけど、全国で2つだけ拒否された県があると。その県が、福井県とある県なんです。それで、なぜか私のところへその人が人づてに来て、「私は後何年生きられるかわからないけど、生きている間に全都道府県を回りたい。ぜひ福井県でやらせてくれないか。出演料も要らない、旅費も要らない、何も要らない。場所だけ貸してくれればいい」という方が実はいらっしゃいます。私、この間、東北まで行ってその方の話を聞いてきました。10分か15分しないうちに涙が出てきて、「この人、すげえな」というふうで。で、僕は決めました。丸岡城の1階で、9月21日、その人に2回語ってもらおうと。ほぼ本人はオーケーですというふうで。これは、本当は県に相談しなきゃいけない、教育長に相談せないかんですけど、勝手に決めちゃったんですけど、丸岡城で、まだ丸岡城と決めたわけではないんですが、福井県のどこでもいいんですが、とにかく何か所でもいい、もし教育長がどこかでやってほしいというなら、一切何も要らないので。その人のしゃべりは、後数年でなくなるんです。

広部委員

遠野の人ですか。

大廻委員

遠野ではないです。遠野に近いですけど。福島県近辺の人で、遠野にも深いつながりがあります。東北では知らない人はいません。88歳のおばあちゃんですけど、かくしゃくとした。資料が必要でしたらお送りしますが、「とにかく、この2つを制圧するまでは私は死ねない」と、それが有名で。ということで、皆さんには日にちが決まりましたらご案内いたしますが、ぜひおいでいただきたい。その人は、お金は要らないというけど、1人1,000円ぐらいもらって、皆さんに集まっていたいで、丸岡城は150人ぐらい何とか入りますが、せめて旅費ぐらいは差し上げないと申しわけないという気持ちで、1泊は泊まっていたくと。蟹は食べられないんですけども、何か違うおいしいものであれするのが福井のもてなし方という気がしますので。

だから、そういう語り部を拒否してしまう、誰が拒否したかは知らないんですけど、拒否してしまうことがいけないので、随分、10か所ぐらい頼んだけど、みんな拒否されたんです。他の県は、だいたい1回か2回で「どうかと」。どこかで福井はそういうものを拒否してしまうところがあるとすれば、改めなければいけないし、やはりそういった人たちを受け入れる下地というものが福井県にあれば、もてなしの気持ちがあれば、福井はもっと歴史を語り部としてつなげていく人を増やしていけるような気がします。何かその辺が冷たいような気が、そう言われてみればそうかなと。自分自身も含めて、反省の意を含めてこれをしなきゃいけないかなというふうに思っています。

祖田座長

他にございますか。

西委員

このテーマの囲ってある部分のことなんですけど、さっき申し上げた福井検定という形のものをつくると。その中の問題に、福井の文化財とか全部入ってくるんですけど、変な話、検定料を、100円とか200円でいいですけども、さっきからお金を取らなくちゃいけないというので、それで集まったお金をこういうところというか、支援金として出すこともできるんじゃないかと。

面白がってやって、そこに行くという。福井検定をただ単に会場でテストを受けるだけじゃなくて、何箇所か指定する現場に行ってチェックするという項目もあっていいわけなんです。熊川

宿はあなたの足で何歩ですかとか、人間の足で何歩ですかという話でもいいし、何でもいいんです。鯖街道は何種類あったかとか。

広部委員

何らかの支援、そういったことが必要なんですかね。

西委員

ただ単に支援しても意味がないし、だから、それを実施した形で支援すればいい。食も、実際に食べられる部分もついていてもいいと思うんですけど、試験の中で。

祖田座長

先ほど、子供たちを巻き込むとか、おじいちゃん、おばあちゃんの伝承とか、ありますし、それから各地域に結構その地域を研究しておられる郷土史家という方がいて、そういう方が相当研究に近いことをやっておられると思います。そういう人たちに大いに協力してもらえれば、相当なものができるんじゃないかという気がいたします。

それでは、次の4-5に移りたいと思います。

4-5は、「県民の誇りと愛着を醸成するための地域文化情報の発信」についてでございます。

具体的な検討事項としまして、枠囲みの部分ですけれども、「地域文化について県民の誇りと愛着を醸成し、誰もがわかりやすいかたちで全国発信し、また、語り伝えるようにするための方策」ということでございます。

最後のテーマとしてご議論いただければと思います。よろしく願いいたします。

西委員

いかに自慢しやすくするかですよ、言っちゃうと。福井の蟹はすごいと自慢できるんだけど、それ以外のものを。福井にいと価値観が分からないものも多いと思うんです。東京へ行くというか、他で生活してみると、その文化とか食べ物とかいろんなものにすごく気がつくんですけど、中にいると人間って気が付かないから、それを気が付かせるのも、テレビの何でしたっけ、読賣でやっている「ケンミン」、あれで結構福井なんかも取り上げられて、福井県民はこういうのが変わっているとかいう、あれもみんな自慢になるし。だから、ああいうものをもうちょっと取り上げる必要があるのかなと。今東京にいと、福井のニュースソースがやたらいっぱい入ってくるんです。小浜もそうだし、いろんな形で、いいも悪いもあるんだけど、そういうのをもうちょっと福井の人間にわからせるというか、「東京でこんなに話題になっていますよ」という。

広部委員

今、市町も含めて、民間もそうなんですけども、福井県のいろんな文化も含めて大きな壁は、恐竜なんかも今年40万人に達しようとしています、東京を中心とした関東圏にほとんど来ていただけないと。恐竜にしてもね。

西委員

知らな過ぎるから。恐竜博物館なんて、あれだけ金を使って、あの赤いポスターとかをつくって電車で張っても知らないんだもの。

広部委員

だから、東京を中心とした関東圏へどのようにして発信をして、来ていただけるか、これが今の本県の最大の課題になっておりますが、なかなかうまくいかない。

祖田座長

観光用のそういう宣伝というのは、どういう形で東京でやっているんでしょうか。

広部委員

様々な形で。

祖田座長

県の事務所もあると思いますが。

西委員

広告代理店と組むのが一番いけないと思うんだけど。旅行代理店と組むのはいいと思うんですけど。恐竜は相変わらず東京で人気なんだけど、福井の恐竜博物館がすごいっていうのは、マニアは東京でも知っているんだけど、普通に好き程度だと知らないんです。上野のやつの方がすごいんじゃないかとばななことを言うやつがいるぐらいですから。

祖田座長

恐竜館というのは、結構他の地域でつくりつつありますね。ですから、今のうちに…。

西委員

でも、当分福井に勝てる場所はない。今の経済事情もありますし、規模といい、黒川さんがつくった面白い建物という。実際毎日のように出ているでしょう、本物が。福井は、そういう意味で財産があるわけですよ、埋没財産が。だから、それは、ほかはそうそうまねできないと思います。

赤土委員

関東からこっちへ来ようと思っても、遠いという意識が多いんです。実際、私なんかは週2往復やっていますから遠いなんて感覚はあまりなくて、その辺の、近くまで行ったぐらいの感覚で行っているんですけども、向こうの人たちにとってはやはりそれが強い。それと、今、恐竜博物館だって、私が連れていった人なんかは、今度はそれを一生懸命あちこちで言ってくれているんです、「すごくよかった。あんないいのは他にない」と言ってくれている。だから、それをいかにまた何回も来れるような形にすることができるか。私らもパンフレットはないですから、インターネットで見てくださいますぐらいで終わってしまっているんですが、やはりそれを配って歩くということも必要だと思うんです。

それから、県庁の人たちも、東京へ行くことってすごく多いと思うんです。でも、行くんだけど、例えば恐竜のマークがついたかばんを誰も持っていないとか。それぐらいやってもいいんじゃないかと。私は久里洋二の書いた「好きです福井」というのを必ずかばんに張ってある。だから、必ず福井の話に入っていくんです、ちょっと見た人が。そういうことも必要だと思うんです。東京から来る時間というのはこれぐらいです、近いというのをもう少し発信できる方法はないかなと。最近ですと、小松便には「金沢・福井」と必ず書いてあるんです。あれはすごくいいですよ、福井ってのはすぐそばだというのが分かる。小松から金沢まで行くのと福井へ来るのとほとんど時間は同じと、もう少し出していってもいいんじゃないかと思うんですけども。

広部委員

今週の18日にプレス発表する予定なんですけども、また新しい恐竜が発掘されて。要するに、鳥になりたちの恐竜一獣脚類というんですけども一の全身のほぼ6割ぐらいの骨を復元すべく、18日にプレス発表を予定していますけども、そういったものをいかにして、特にさっき申し上げた、東京を中心とした関東圏にアピールしていくかと、そういったことが非常に課題なんです。

祖田座長

本物に近い、「おおっ」と思うような恐竜を、福井の恐竜だというようなことはできませんかね。

広部委員

東京ですか。

祖田座長

東京駅。

西委員

ちょっとしたことなんですよね。そうすれば、アクセスがどうのこうのでも来ますよ。

祖田座長

3時間半ですから、そんなに遠くないです。

西委員

それは、よっぽど行きたくなけりゃ、3時間半あってもエキスキューズになるわけですけども、来たいと思ったら全然関係ないと思うんですけど。もっと遠いところへみんな行くわけだから。

大廻委員

小松空港にはあまりないですよ、福井のコーナーはあるんだけど。

石川県なんだけど、福井のコーナーはあるでしょう。あそこにあの丸い形につくって、恐竜の形にしてしまっ。

広部委員

小松空港というのは石川県の空港なので、なかなか限界があつて。白峰のほうに石川県の恐竜博物館があつて。

大廻委員

いや福井の資料本当に少ないんです。

西委員

恐竜ツアーを。小松から勝山まで1時間かかる？かからないか。そんなところでしょう？

広部委員

まあ、それぐらいですね。

西委員

おりてから多少あるから、だから、それをどこの旅行会社と組むのか、観光課も入れなきゃいけないんですけども、それをやらないとだめでしょうね、限定何名様という形で。東京の人間は知らない、自分で化石を掘れるというのを。恐竜発掘ツアーという。

大廻委員

オランダかどこかへ行ったときに、動物の形をした電車がよく走っていました。その先に何かあるかといったら、動物園なんです。だから、思い切って恐竜の形をした電車をつくってしまっ

赤土委員

だから、今、恐竜だけに絞ってしまうと、どうしても文化というのが切れてしまいがちなんですけども、それに対して、例えば文学だったら文学のいろんな作家、高見順であり、三好達治であり、その辺の人たちを訪ねる旅をしてみるとか、その時に一緒に回ってくるとか、やはり企画を幾つも打たないとなかなか難しいかもしれない。

佐野委員

赤土委員おっしゃっているように、選択肢はいろいろありますよと、福井は。そういうメニューをいっぱいつくって、例えば有史以前だったら恐竜がありますよと。有史以前から有史以来今日まで全てありますよと。縄文やったら鳥浜がありますよと、中世やったら朝倉遺跡がありますよと。古代史やったら継体もあります、足羽山もありますよとか、それぞれ歴史的にみんなある

わけでしょう、鳥浜もあるし、それから朝倉遺跡は中世の遺跡で、全国各地は発達し過ぎてあんな中世の遺跡がああやって丸ごと出てくることはないですからね。鳥浜だって、三内丸山遺跡、それから佐賀の吉野ヶ里、あれは弥生でしょう、三大遺跡の1つですから、それは目玉なんですよ。恐竜は、あんな巨大なものが出る。結構有史以前から有史以来今日まで全部ありますと。それで、先ほどおっしゃったように、文学やったらH氏賞を三国の平澤さんが作って、三好達治からずっとありますとか、美術では前衛運動が戦前からあって現代美術につながっていますとかいろいろジャンルで。音楽なら、田舎やけど、世界でも奇跡と言われる、いい音が出るハーモニーホール、ハーモニーホールの大ホールというのは普通ならつくれないらしいです、偶然としか言えないほどいい音が出ると、ある専門家は言っています、音楽家の方。小ホールはあまり大したことはない、普通やけど、大ホールだけは最高のものでつくって、あれだけ音がいいのはちょっと、人知を超えた何かがあるんじゃないかと。そんな、いろいろあって。

それで、朝倉やったら、酔象将棋の駒が出ている、象が酔っ払うと書く。あれは現代将棋の前です。京都と福井の2か所しか出ていないんです。県将棋連盟は、朝倉将棋というので酔象を使った将棋大会もやっているんです。2段構えの将棋なんやね。王さまをとられても、酔象が相手を敵陣に投げ込んだら太子に成る。太子に成ったらちゃんと後継者を育てて、まだ戦争は続くという、そういう長時間の将棋なんやね。だから、将棋のプロはそんなのを研究したら、自分の勝ち負けに関わるから誰も研究しない。女性やったら、山田久美さんとか女流の人は興味を持って将棋まつりに来てくれる。朝倉将棋を打つんです。

西委員

いかにも戦国大名らしい発想だよな。

佐野委員

跡継ぎをつくるという。

西委員

朝倉は五代で消えたんだけど。

佐野委員

だから、新しい定跡も開発している。酔象が取られたら、それは相手の駒にならない、変に交換もできない、ものすごく難しい将棋なんです。東の天童将棋の人間将棋があるけど、こっちは象の将棋、酔象、朝倉将棋でやるとまたそれが…。

赤土委員

県へちょっとお願いしたいんですが、国民文化祭があったんですけども、その後のフォローというのはどの程度されているか。あれから、一発で全部終わってしまっているのがすごく多いんです。今、私たちは現代美術のほうで、ONOメモリアルでいろいろ企画してやっているんですけども、そういうことを次々と前へ、せっかくだくさんの人が福井へやってきて国民文化祭をやってもらったので、その辺のところを、今の将棋もそうですが、いろんなものがあったらいいんじゃないかと。そういうイベント的なものか、またはそういう企画がもしされているものがあれば、そういうものに対する補助とかを進めていって、もっとたくさんの人に来てもらおうと。昔来たあのときに—4年前ですか—種をまいた、国民文化祭に来た人たちがみんなここへもう一度リピートして来てくれるぐらいのことを企画できたらいいなと思うんですが。この次まででいいんですが、そういう後のフォローといいますか、それから後続しているものは何かあるかどうかというのもちょっと調べておいていただければありがたいと思うんですが。

竹川委員

先ほどの続きになりますが、福井のアピール、ツアーの話です。

東京・関東圏が来ないというので、何かそういうコースを、今思ったんですけど、勝山と今度全国植樹祭がある一乗谷、それからハーモニーホール、最後は食べることも確実にコースに入れる必要がある。絶対おいしいですから、自信を持って。

西委員

食べて、温泉に入るとつけないと。温泉のパワーの魅力がすごいです。

竹川委員

やっぱりそういう1つのコースを。ハーモニーの時は必ず何かやって、その時は企画をハーモニーでやっている、ハーブとマリンバでも結構です。福井産のすばらしい音楽を演奏しているんだというようなコースを年に何回か設定してやると。東京の人も、福井県人もいますから、その人たちにもアピールする。

西委員

それで、眼鏡をつくって帰るとか。全部つながって。

竹川委員

そうすると、だんだんそれが口コミになって広がっていくんじゃないかなというような気もいたします。

西委員

福井の日本一尽くしをすればいいです。

伊藤委員

もう時間がないでしょうから手短に言いますけど、今のテーマの情報の全国発信というんですか、今の人は一私も東京に住んでいますけども一何でもインターネットなんです。ですから、インターネットということを活用しなかったら情報発信はできないです。他のアクセス、情報に接しようとする人が非常に少なくなっているから。次回ぜひお願いしたいんですけども、福井県の情報発信の現状ということについて、本当に簡単でいいですから、ちょっと報告いただきたいと思うんです。公的な統計とかそういうことではなくて、民間からの発信でもいいですし、そんなことを報告していただければと思います。

以上です。

赤土委員

ヤフーに入るとすぐ右側のほうにぽっと出ているでしょう、いろんな広告が。ああいうふうなものは、県の広告って出せないんですか。

教育政策課長

やったことはあります。アクセスを増やすのにというので、増やしていただいたことがあります。かなりの金額を取られました。基本的に、今、金をかければできることはなかなか…。

西委員

それよりも、ヒットするワードを含めることです、それだけ。その方がお金はかかなくて、ワードで調べても、福井が引かかるようなワードをいかにちりばめるとか。

教育政策課長

わりと県庁職員は、今言ったようなこととか、アクセスが多い分だけ順番が上へ上がっていきますので、そういった涙ぐましいことを意識してやったりと。

西委員

職員みんながブログを福井のことだけを書いて。

伊藤委員

福井県の一般のことにわたって、福井県Wikipediaを、福井県版のですね。

祖田座長

ちょうど予定の時刻になりました。

皆さんから非常に具体的な提案がたくさん出たんじゃないかと思いますので、ぜひ活かしていただければと思っています。

それでは、大学のクラブ活動の話について、前回、大学ではどんな文化活動をしているとの質問があったということで、述べさせていただきますが、私どもの若い頃と比較せざるを得ないんですけれども、いろいろなものがあります。

まず、数から言いますと、福井県立大学には74サークル、福井大学には合計133、福井大学は県大の3倍ぐらいの学生数になっておりますので、1クラブの人数は多い。私なりに眺めまして、果たしてどんな特徴があるのかなといろいろ考えてみました。まず、感じますことは、例えば文芸部というのがあるんです。何を書いているのかねと学生に聞きましたら、漫画、アニメ、それからゲーム、そういったものを研究しているというんです。いわゆる文学の要素としては全く新しいといえますか、そういう感じを受けました。

それから、情報関係のサークルが結構あると。例えば、放送に関する研究会だとか、メディアサークルとかがありますし、それから、ジャーナルの研究といえますか、情報に関する研究会というものが結構ありまして、こういう部はどういうことをやっているのか、具体的には分かりませんが、こんな新しい傾向かなと。

もう1つ、私が思いましたのは、社会福祉、これは、学部構成との関係になるかもしれませんが、ボランティアのグループが結構あるということです。子供たちのためのとか。といったことが、軽音楽とかそれからスポーツとかもちろんありますけども、今言いましたボランティア活動とか、情報とか、文芸といった、非常に新しいといえますか、昔の文芸部からは想像がつかないような、そんな特徴かなと。

今日の議論と若干結びつけて言いますと、皆さんのご意見をお聞きしながら、文化というものを、地域を挙げて、地域づくりに結びつけるような形でというふうなことを考えますと、例えば若い者を動員しなきゃいかんのではないかと。今、ボランティアということが非常に注目されるわけで、団塊の世代の方が今後高齢社会の仲間入りをされると、学生もボランティアで行っているですよというところが結構あるんです。こういうのを大いに活用しない手はないんじゃないかということ、今日、ご意見を聞きながら感じました。

あまり深いことは、これだけでは分かりませんでしたので、そんな程度のことしかお話することはできませんが、参考になればと思う次第です。

それでは、大変長時間にわたりまして、2時間半一途中で休みを入れなきゃいけないのじゃないかと思いましたが、皆さんのご意見が大変盛り上がりまして、本当に貴重な意見がたくさん出たと私は思っております。

他になければ、今日はこれで終了させていただきたいと思いますが、よろしいですか。

どうもありがとうございました。

教育政策課長

貴重なご意見をありがとうございました。

次回の会議でございますが、あらかじめ皆様からご日程等をアンケートさせていただいておりまして、予定といたしまして、5月15日金曜日1時半ということで、第4回目として開催させていただき予定で準備を進めさせていただこうと思っています。今回は、今回いただきましたご意見等をまた整理させていただきまして、例えば、分野をものすごく絞って、美術館をどうしようとか、そういった分野に絞ったようなご意見をいただきますとか、後、今日は全体の柱立てをさせていただきましてけれども、今後提言にまとめていく段階の柱として、これでいいのかどうかということを少しご意見いただければ、取りまとめの参考にさせていただこうと思っていますので、次回また、資料を事前に配付するような形でご意見をいただきたいと思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。

また、本日のご意見につきましては、ホームページ等での公開となりますので、その点、ご了承のほどよろしくお願いしたいと思います。

ありがとうございました。